

苗場山麓 ジオパーク

Vol.
55

振興協議会だより

〔発行日〕 令和4年6月27日
〔発行〕 苗場山麓ジオパーク推進室
〔お問い合わせ〕 025-765-1600



最年少認定ガイド・樋口幸希さんから苗場山麓ジオパークガイド認定証授与式の作文が届きました

表彰式

ぼくが苗場山ろくジオパークに興味をもったきっかけは、ジオサイトについて調査して、たくさんのジオサイトの魅力や情報を知って「すごい!!」「もっと調べたい!!」と思ったからです。そして、ぼくはあれから、将来、ジオパークに関するなじょもんの人になりたいと思っています。

ぼくがジオ検定を受けて、合格して、ガイドの資格をもらってこれからどうしたいかという、ぼくはこの資格を生かして、どんどん夢にたどりつくための、資格を手にいれてどんどん登りつめて夢にたどりつけるようにしたいということです。

そしてジオ検定をうけて合格したこの成果を将来の夢につなげたいと思っています。



津南小学校5年生 樋口幸希さん

第7回目のガイド認定検定が行われました。内容は子ども向けではなく、一般向けのものです。大人でも合格が難しく、これまでの最年少合格者は高校3年生でした。その記録が大幅に更新されました。これは一重にご本人の努力と興味の賜物であり、家族など周囲の支え、そして、学校での総合学習における熱心な取り組みの成果です。この取り組みが持続されるよう事務局でもサポートしていきます。

未来の苗場山麓ジオパークの専門員に今後も注目です。【苗場山麓ジオパーク推進室・佐藤 信之】



令和4年度 苗場山麓ジオパーク学術研究奨励事業 採択者決定

氏 名	所 属	研究の名称
植木 岳雪	帝京科学大学	カメラトラップ法とシール貼り付け法によるジオサイトの年間来訪者数の推定
本田 秀生	小松市埋蔵文化財センター	苗場山麓における自然と人間のかかわり ー編組品、特にかご類にみる植物の利用とその技術2ー
カレイラ松崎順子	東京経済大学	津南町の「持続可能な観光」に関する現状と今後の展望
涌井 泰二	苗場山麓の自然を考える会	千曲川遊歩道周辺の自然環境
山口 弘幸	鎮西学院大学	障害福祉サービス事業所と連携したユニバーサルデザイン化の検証とジオ体験プログラムの創出



大地のたからもの～苗場山麓ジオパーク特産商品ご紹介⑨～



【清酒 ー 霧の塔 ー】

津南醸造株式会社 〒949-8313 新潟県津南町秋成

☎025-765-5252 営業時間 8:00～17:00 定休日: 土・日・祝日

ジオストーリー

苗場山系2,000メートル級の山々に降り積もった雪がもととなる湧水と、河岸段丘の大地で栽培された酒米で醸した清酒です。

※苗場山麓ジオパーク振興協議会・商品開発部会事務局では、新規商品の申請について、随時ご相談を受け付けております。
お問い合わせは左記まで 津南町役場観光地域づくり課 電話 025-765-5454



〈再審査に向けてひた走る室長日誌5〉

5月21日に幕張メッセで開催された南紀熊野ジオパークの【ユネスコ世界ジオパーク国内推薦】に向けての公開プレゼンテーションを拝見しました。世界を代表すべきユネスコジオパークとして高い水準の運営理念や活動が問われました。現在、46箇所ある日本ジオパークのうち、糸魚川ジオパークを代表格とした世界ジオパークが9箇所あり、次なる10番目の世界ジオパークに向けて南紀熊野ジオパークの皆さんが高らかに手を挙げ、誇らしげにプレゼンテーションをしたのでした。南紀熊野ジオパークの世界ジオパーク登録を皆さんで祈念しましょう！

さて、苗場山麓ジオパークは再審査に向けて「プログレスレポート2018-2021」の書き込みを始めています。その記載事項は、ユネスコ仕様です。すなわち、日本ジオパークネットワークを構成する各ジオパークは、世界ジオパークの候補であるという意味から、ジオパーク国内推薦を前提とした共通のユネスコ事項の記載が求められています。

例えば、「エリアの一体性」、「指摘事項に関する取組・改善点」、「ユネスコ世界ジオパーク基準の検証」などがあります。エリアの一体性では、栄村と津南町との協働を進めるための基盤を取り上げました。すなわち、「雪国観光圏」におけるスノーカントリー・トレイルや信越トレイルとの交差、「上信越国立公園」、そして、「日本遺産」や「佐武流山周辺森林生態系保護地域」、「日本の里100選」などの地域要素のライセンスを基盤とした保全と活用の一体性です。指摘事項の取組・改善点では、「防災・減災への取り組み強化」の項目が注意されます。ここでは「栄村防災の日（3月12日）」の指定を強調し、苗場山麓に広がる災害サイトの認識と、その地質的背景を探る研究、その結果と原因を分かりやすく翻訳するガイドとの連携が大切です。さらに、震災復興祈念館「絆」とジオパーク中核施設の仮称ジオカルの有機的な利活用計画を書き込む予定です。

また、「ユネスコ世界ジオパーク基準の検証」では、多くの記載項目が設定されています。例えば、「可視性（ビジビリティ）」では、1「講座・説明会等の開催」、2「印刷物の発行・関連商品の開発」、3「ウェブサイト」、4「広報・メディア活用」、5「展示」、6「PR動画の制作」への書き込みが求められ、その中で、1・2・5に関しては教育委員会としての積極的な活動があります。しかし、観光的な括りである3・4・6は、まだまだ課題があり、この点は、第1回再審査の際にも強く指摘された改善点です。しかしながら、2の項目に含まれる「関連商品の開発」では、商品開発部会と小学生とのコラボを展開しています。それが「ジオカードとジオパーク認定商品とのコラボ戦略」です。大人には考え付かない子供の視点とアイデアで構築された協働作業です。

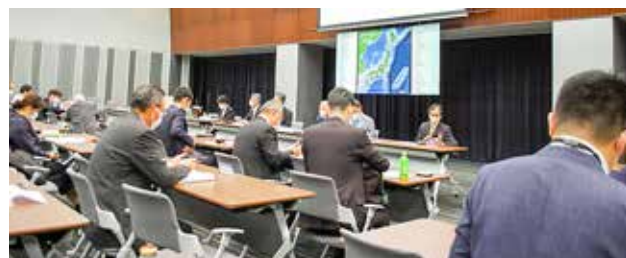
また、「情報、教育、研究」という項目では、栄村や津南町の総合振興計画や教育プランにジオパークが位置付けられました。特に「教育における活用」で

は、「ジオ学習」はさることながら、元世界自然保護基金（WWF）の小森繁樹先生を招き「海洋におけるマイクロプラスチックの問題」を子どもの目線で内陸盆地から考える学習会を展開し、夏休みに信濃川での「ゴミ回収活動」が始動します。さらに、小学生時代にジオ学習した高校生が「災害学習」をテーマに講演内容を考え、組み立て、母校に出向いて講師になり後輩に伝える、学習会が行われ、その高校生たちは、新潟県サミット大会において発表し、地域特別賞・ベストラーニング賞の栄誉を得ました。その後輩である津南小学校4年生（令和3年度）の樋口幸希君は大人に混じりジオパーク検定を受検し、見事にジオパークガイドに登録されました。

5月26日には、参議院会館で「第15回日本ジオパークネットワーク総会」が開催されました。日本ジオパークネットワークの事務局は首長部局や観光部局が担っていますが、苗場山麓のように教育委員会が事務局を担っているケースは稀です。よって、その活動の方向性の主軸に違いがあり、その違いこそが我ジオパークの特徴であり、その活動に本質があると自負しています。しかしながら、多勢に無勢であり、「いけいけ観光振興！」の波に吞まれそうになりつつも、我ジオパークは「地域資源の保全と郷土学習」に一丁目一番地があり、その広範なジオ学習体系の整備こそが、副次的なジオツーリズムの定着と展開を約束するものと考えます。そのジオツーリズムは、顔が見える関係を守り、少人数で展開することを目指した場合、約1万人が目標基準です。ガイド部会では「ガイドからインタープリターへ、伝えるのはモノからコトへ、そして、保全への熱い思い」をスローガンに活動が展開しています。

第15回総会での第3号議案でも、多くの課題が議論されました。特に「防災教育活動」と「海洋ゴミ」を注視しました。すでに我ジオパークでは取組を始めていますが、全国で連携した防災教育カリキュラムの構築や内陸盆地の厳冬期に発生する災害を想定した防災教育の実施、内陸盆地河川から眺望した海洋ゴミ問題をジオパーク中央事務局と連携し進めていくことが求められています。

再審査は11月第2週の2泊3日と二人の審査員先生が決まりました。栄村と津南町が手と手を携えて地域資源の保全と地域災害を踏まえた防災学習に力点を置いたプレゼンテーションができるように準備に入りたいと考えています。皆様、よろしくお願ひいたします。



日本ジオパークネットワーク 第15回通常総会

認定ジオガイド
が伝える

ここが好きだよジオパーク

認定ジオガイドがおすすめの場所、
もの、ことなどを紹介していきます。

齋藤 和幸さん



信越国境 東部谷の魅力（ガイド No. 42 齋藤 和幸さん）

私が住んでいる栄村の東部谷は志久見川を挟んで津南町と栄村が隣接する信越県境にあります。苗場山と毛無山の溶岩で作られた台地を、毛無山から流れる北野川と天代川が、鳥甲山から流れる釜川と合流して志久見川となり、東部谷の中心を南北に流れて千曲川へ流れ込んでいます。中津川の河岸段丘と同じように、長い時間をかけて東部谷の河岸段丘が作り上げられたものだと思います。長瀬から原向に上がる県道の途中から、私の集落（切欠）を眼下に見ながら東部谷を見渡せるポイントがあり、ここからの景色が気に入っています。また、原向まで上がると一面に水田が広がる平地となり、毛無山と鳥甲山や苗場山、関田山脈や山伏山など360度見渡せる気持ちのいいパノラマ景観が広がります。

さて、志久見川に話を戻しますが、豊かな雪解け水が清流となり水田を潤してくれることでおいしいお米ができる、地元にとって貴重な川ですが、それとは別にもうひとつ大事な資源であると感じているのが、水力発電です。志久見川には2つの発電所があります。1つ目は極野にある志久見川第1発電所で、2つ目は長瀬にある志久見川第2発電所ですが、ネット等で調べてみると1940年代に作られ、両施設合わせての発電量出力は最大1万2700キロワットで、標準的な1世帯当たりの消費電力量で単純に計算すると2万4700戸あまりの電気を賄っていることになります。これは栄村の全世帯の30倍以上の世帯で使える電気量になります！

発電には水力以外にもいろいろな方法があり、原子力や火力は安全性や温暖化が問題とされ、太陽光や風力など再生可能エネルギーの利用が注目されるようになってきています。昔から水力発電は自然を利用した仕組みとして興味がありましてし、水という生活に欠かせない大切なものとして、村にある無尽蔵の資源だということがこの地に住んでいて誇りに感じていました。もちろん発電による取水の影響で自然の川の生態に影響を与えていることもあると思います。東部谷の豊かな水量と落差を作れる地形をうまく利用した発電利用に、先人の知恵と努力にあらためて敬意を表したいとともに、豪雪地と言われるほどの冬の雪の量にはちょっぴり苦しめられることもあります。そのおかげで豊かな自然が溢れる中で生活できることに幸せを感じます。

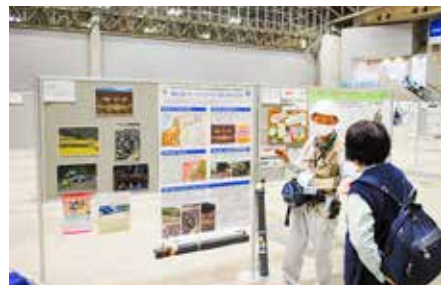


東部谷を蛇行して流れる志久見川(中央)、右が津南町上郷地区、左が栄村志久見地区



日本地球惑星科学連合2022年大会・日本ジオパーク運営会議に3年ぶりに参加しました (会場:千葉県幕張メッセ)

5月21日(土)、日本ジオパークネットワーク運営会議が現地で行われ、日本ジオパークに係る全国大会や全国研修会等の今年度の共有事項を確認し、その後、「皆さん、お久しぶり(はじめまして)!近況等、お話ししましょう!!!!」のテーマでグループワークを行いました。3年ぶりの参加となり、新顔が増えたことに気付きました。翌22日(日)には、特別展示会場で「小中学校教科書から読み解く自然災害教育」の発表を拝聴しました。小中高の理科や社会科で取り上げられている災害教育の構成についての議論がなされていました。災害教育は、地域の地形や地質など適切に教材に取り込み、地域の実態に合わせた指導計画を作成して実践するのがよいこと、各ジオパークで学校現場と協同で補助教材をつくりあげることが双方の理解も深まるのではないかと話題になりました。



今回の大会で、ポスター発表を行いました。テーマ「ジオパークで学ぶ日本列島の特徴と地球・自然・人の相互作用」を踏まえ、「苗場山麓ジオパークにおける火成岩の有効な活用」をタイトルに掲げ、結束の石垣田を紹介し、柱状節理のかけらを活用した角礫の石垣田、崖錐堆積物から吹き出す風穴に生育する植物、また、石垣田が作られた経緯や歴史について説明を行いました。ポスターは、農と縄文の体験実習館なじもんにしばらく掲示しております。是非ご覧ください。【専門員・仲野 浩平】



突撃しよう!となりのジオ便り～北海道・洞爺湖有珠山ジオパークからこんにちは～(学術専門員 佐々木 聡史)



変動する大地を実感しよう! Let's feel the Ever-changing Earth!

洞爺湖有珠山ジオパークは、苗場山麓ジオパークから北東に約650km離れた場所にあります。1市3町(伊達市・豊浦町・壮瞥町・洞爺湖町)から構成される当ジオパークは、北海道南西に位置し、越後湯沢駅から公共交通機関を利用し約7時間で来道できます。

洞爺湖は、今から約11万年前に起きた巨大な噴火で生まれ、有珠山もまた約1-2万年前に噴火を繰り返して生まれました。さらに、約400年前から現在まで9回の火山活動が発生しました。火口の位置を変えながら、最近でも20-30年に1回噴火を繰り返し、噴火の度に大地を押し上げ、新たな景観を生み出し続けています。

有珠山から眺める洞爺湖は絶景で、青葉や紅葉、銀雪など四季折々の変化を眺めることができます。また、昭和火山や有珠山の銀沼火口などでは、噴火を見ることができ、現在も続く火山活動を身近に感じることができます。加えて、これまでの有珠山噴火による被害を多くの人々に伝えるために、金比羅山麓散策路や西山山麓火口散策路では、災害遺構を見学することが可能です。さらに、洞爺湖岸域には温泉や飲食店、宿泊施設などが並び洞爺湖や有珠山を見ながら北海道の幸を味わうことができます。特に、火山灰台地で育った上質な野菜や果物を用いたジオパークピザやソフトクリームは、絶品です!是非一度召し上がってください!

日本では、2011年東日本大震災や2014年御嶽山噴火など至る所で自然災害が発生しています。有珠山は、22年前の2000年に噴火しました。この噴火では、これまでの火山研究が活かされ、噴火前に地域住民の避難を完了させ犠牲者ゼロを実現しました。この結果は、研究者や防災機関に加え、地域住民が減災のための適切な行動をした結果です。

私たち人間は、自然災害を予期することは出来ませんが、過去の災害を多くの人々に伝え、減災に繋げることが可能です。2000年有珠山噴火による被害を忘れないため、2008年から洞爺湖有珠山火山マイスター認定制度を実施し、マイスターの方々を中心に減災について地域や世界中の人々に伝える活動を行っています。皆さんも洞爺湖有珠山ジオパーク地域の大地の変化と一緒に見て・楽しんで・感じて・考えてみませんか?



ジオパークピザ作りに挑戦する子どもたち



洞爺湖有珠山火山マイスター認定試験の様子